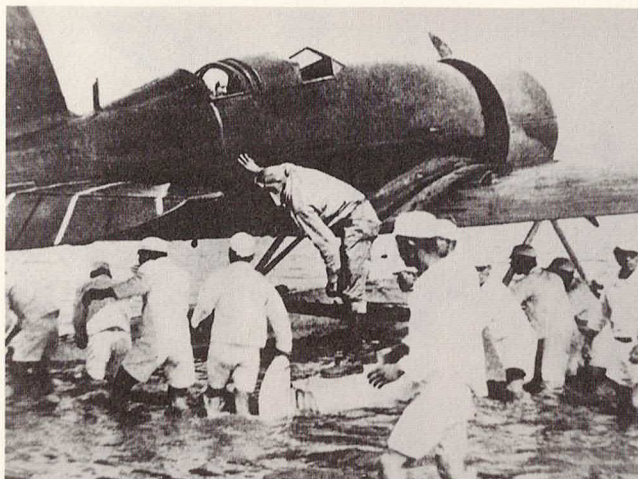




霞ヶ浦に着水したシリウス機に、誘導のために駆け寄る航空隊の整備員。
1931年8月26日。(根室市博物館開設準備室提供)

1931年9月12日、土浦の霞月楼・松の間で開かれた歓送祝宴。
(堀越恒二氏提供)



失意の時 *Hour of Lead*



チャールズ・ジュニア〔1歳〕
1931年

序 章 その2

私の日記や手紙をまとめた本では、この前書きを使ってその時期に私に起こった出来事の背景となる事実を説明してきました。この章（1932年）では、そのような説明はほとんどいらないでしょう。事実はただ、1932年3月1日の夜、ニュージャージー州ホープウェルに近い我が家から、ベビーベッドに寝ていた生後18ヶ月の息子チャールズ・リンドバーグ・ジュニアが連れ去られ、窓枠には、「子供を無事に返して欲しければ、身代金をよこせ」という書き付けが残されていた、ということです。

私の中の不可解さを

10週間に及ぶ誘拐犯との交渉や接触、そして、求めに応じての身代金の受け渡しの後、息子は家から数キロの森の中で遺体となって発見されました。当時の新聞はこの悲劇のことで紙面が埋められ、この犯罪については本も多く書かれました。この時期に私は日記を再び書き始め、また、誘拐事件の後、毎日のように夫の母に書き送った一連の手紙には、事件の進展とその渦中にいる私達のことが詳しく述べられています。

ここで説明したいのは、私の内面にある不可解さなのです。これから読んでいただく手紙は最近出てきたのですが、私はどうして、あんな手紙を書くことが出来たのでしょうか？ これらの手紙は、自分で書いた後、ずっと見ることはなく、夫の母の書類等と一緒に、大切にしまわれていたのです。読み返した時、私はまず衝撃を受け当惑しました。あの恐ろしさと不安の真っ只中で、私はどうやってあれほどまでに自分を抑さえ、平静を保ち、事実を書くことが出来たのでしょうか？ 何よりも何故、あれほど希望を持ち続けることが出来たのでしょうか？

10週間分の忠実な記録には、幻覚を見ているようで、現実とは思えないものがあります。ホープウェルから私の母がくれた手紙にもありましたが、あれは、もちろん悪夢でした。

「悪夢は、変わってもやはり悪夢なのです。」

その気持ちは、義母への手紙でも確かめることが出来ます。

「毎日、言葉では表せないような混乱状態が続いています。昼間は、階下に警察官の立入り所が設けられ、刑事や警察官、秘密警察官が大勢出入り入ったりしています。夜になると、食堂や他の部屋はマットレスが敷かれ、足の踏み場もありません。いつ何時でも構わず、刑事達が会議を開くために、私達は眠っているところを起こされ、部屋を開け渡さなければならぬのです。あまりにも、信じられないような毎日で、もう何も感じなくなっていました。」ここに不可解なことを解く一つの鍵があります。

もう一つの鍵は、希望でした。最初のショックのあと、息子はきっと無事に返されるだろうと信じていました。回りにいる人、——友人、アドヴァイスをしてくれる人達、刑事、警察官——が、私達に希望を持たせ、その希望を義母に私は伝えようとしていたのです。

「400の市を調査した結果、誘拐された子供のうち2,000人が戻ってきています。」

「犯人が、すでに死亡している人のことで取引を行なった例は、犯罪史上かつてありません。」等々

周囲に支えられて

私は、希望を持った人ばかりではなく、しっかりした自制心のある人達にも囲まれていました。自分を抑さえ、自分に厳しくすることは、私の実家の家族だけではなく、夫の家族の伝統でもありました。私は家族

の勇氣によって支えられていました。しっかりすることも必要でした。それは、当時私の体内に宿っていたもう一人の子の安全のためばかりではなく、さらわれた長男を無事に取り戻す努力をするためにも必要だったのです。戦争や大災害の時のように、私達にはしなければならぬ事がありました。同じ目的に向かって、私達と共に努力してくれた献身的な人々のお蔭で、頑張り通すことが出来たのです。

また、戦争と同じでこの事件でも、グラグラと煮えたぎる命の大釜のように、善も悪も共に吐き出されました。〈強欲、狂気、残酷、無関心〉と〈善良、献身、自己犠牲、勇氣〉とが向き合い、情報の広がる炎の回りで騒ぐ人々もいれば、誘拐犯の使った梯子の横でカメラに向かってポーズをとる政治家達もいました。捜査官気取りの市の役人は、夜中に私を起こし、彼の推理を再現するよう求めましたが、最後は子供を炉の中に放り込む——というものでした。また、家庭を離れ、夜は私達の家の床に寝て、手助けしてくれた人々もいました。私達夫婦は多くの人々の献身、誠実、希望、そして祈りによって支えられていたのです。

しかし、6週間たっても努力は実らず、身代金を支払ったにもかかわらず子供は返されず、手がかりも無くなってくると、希望は小さくなってきました。私は、夫や家族や、一緒に努力してくれている人達のために平静を装いながらも、自分の中にたまった絶望のはけ口が必要なことに気がつきました。正気を保つために、私が再び日記を書き出したのは、長男の遺体が見つかる2日前のことでした。

なぜ、これを出版するのか

それにしても、次の疑問は「なぜ、これを出版するのか」ということです。なぜ、40年も前の悲劇で味わった苦しみと恐怖をあえて曝すので

しょうか？ 悲劇は、誰にでも起こります。「子供を亡くした人などたくさんいるもの」と私は、子を失ってから数週間たった頃の日記で、自分に言い聞かせています。「夫、妻、恋人、親、それに家族全部を失った人だってたくさんいる」と、書き加えても良かったでしょう。

恐怖は、あるいは、それほど普遍的ではないかもしれませんが、この40年間を振り返ると、一個人としての恐怖のみならず、世界中の人々が集団として経験した恐怖は、一体、どんなものだったのでしょうか——戦場で、一般市民に対する爆撃で、強制収容所で、拷問で、ガス室で、集団処刑で、広島と長崎で、リンチと市民権運動下での殺人で、また、かつてないほどの数にのぼる町々での「単なる」路上での犯罪で——大量に殺された人々。この膨大な恐怖を集めたものに比べれば、犯罪が今ほど多くはない昔に起こった、たったひとつの犯罪のもつ意味など、些細なことではないでしょうか？ 当時、ごくまれな事件であったということと、またそれを取り巻く情報の炎のような広がりが相まって、息子の誘拐事件は世界中にショックを与えました。

「なぜ、これを出版するのか」という問いへのもっとも単純な答えは、この悲劇は、私の身の上に起こったから切り離せないものであり、私のありのままの記録からはずすことなど出来ない、ということです。この事件について書かれた当時の新聞記事の多くは、噂や作り話に基づいたものでした。私が自伝を出版するにあたって、そもそもの前提であった、私個人の体験の説明も十分なされるべきであると思いました。

苦しみの体験から

とは言え、私に出版する気を起こさせたもっと深い理由は、苦しみというものは、どんなに多くの人と分かち合っても、結局はその本人ひと

りだけのものだということです。

「この世で痛みほど、本人にしか解り得ないものはない」と、イーディス・ハミルトンは書いています。「大きな共通の絆であることも確かだが、そのことに気づくのは、痛みが去ってからである。苦しむことは自分ひとりになることである。人が苦しむのを見守るのは、我々ひとりひとりを他の人から分け隔てる壁を知ることである。苦しむのは、その人その人のみである。」

確かに、苦しみは本人のことなのですが、それは同時に普遍的な経験でもあります。苦しみは一定の似かよった段階を踏んで進み、そして、病気が治る時のように癒えていきますが、このことは、〈死〉に対しても言えることなのです。自分以外の人生にもこれらの歩みを見ると、教えられるものがあり、それは、救いにさえもなるかもしれません。

私は、単に古くからのピューリタンの教え「苦しみによって悟らせる」ことを言っているわけではありません。本当の苦しみは、何も悟らせてはくれません。もし、苦しみだけで悟らせることが出来るのであれば、世の中は賢明そのもののはずです。それは、苦しみは誰にもあるからです。苦しみには、死者に対する哀悼の気持ち、理解、忍耐、愛情、開かれた心、傷口をさらけ出したままにしていることをいとわない気持ちが伴わなければなりません。これらすべてと、ほかの要素が合わさり、もし状況が適切であれば、悟らせることが出来るでしょうし、生まれ変わることもつながっていくのです。

しかし、苦しみには、単純な公式やすばやく抜け出す方法もなければ、なぐさめも、簡単に受け入れる方法也没有。キャサリン・マンスフィールドが言ったように、「間違いなく乗り越えていくもの」なのです。

「小さな舟が暗く恐ろしい深い海に入りこみ、我々はただひたすらそこから抜け出したいと泣き叫ぶ——『もう一度、陸に帰して』と。でも、それは無駄である。だれも聞いてはくれない。暗い陰のような漕ぎ人は、舟を漕ぎ続ける。人は、じっと座って目を開いていなければならないのである。」

一般の認識とは裏腹に、悲しみの初めの日々は最悪のものではありません。悲しみのため、初めはショックと気が遠くなるほどの「信じられない」という気持ちになります。手足が切断されたようなものです。ショックの後には、鋭い痛みが襲いますが、これは一種の“濃縮された存在”で、ほとんど取りつかれている状態に近いものがあります。まだ、失われた筈の手足の神経の末端までも感じられます。悲しみの深さが、自分と死んだ人との間の距離を消してしまったかのようです。もしかしたら、実際に、人体の一部が死んでしまうのかもしれません。

人は、オルフェウスと同じに、死んだ人の旅立ちの直後、故人の後を追おうとします。でも、オルフェウスもそうでしたが、どこまでも行けるわけではなく、長い旅を終えて戻ってきます。その人は運が良ければ、生まれ変わります。一生の中で、何回も死んで生まれ変わる人もいます。それ以外の人にとって、生まれ変わるには土地はあまりに不毛で、時間はあまりにも短いのです。

死者、すなわちサン=テグジュペリのいう、「死んでしまった真実の友」との新しい関係を育てることは、このような過程の一部なのです。何かが生まれる前の懐胎期間が総てそうであるように、新しい関係を育てるのは遅々とした暗い、沈黙のプロセスです。その間、その人は痛ましいほど無防備になっています。その人は、体内に育っている新しい命を他のものから守り、大切にしていなければなりません——子供のよう

人は悲しまねばならず、また、悲しみよりもさらに耐えがたいほどの、何も感じない時期を通り過ぎなければなりません。習慣や伝統が与えようとする、簡単な逃げ道は拒絶しなければなりません。愛する人を亡くした人を慰めるために、家族や友人がまずはじめに、そしてもっともよく試みるのは、気を紛らわそうとすることです（「外に連れ出そう」「遠くへ連れていこう」「違うことをしてみよう」「人を呼んだら元気が出るのでは……」「座り込んで、悲しんでばかりいたら良くない」）——悲しむことこそもっとも必要なことなのです。

その一方で、自分自身を哀れみ、悲しみを賛美したい誘惑もあります。シェークスピア作『ジョン王』の中で、「わたしは、自分の悲しみに誇りを持って、と教えよう」と、コンスタンスは堂々と叫びます。その言葉とは裏腹に、彼女の悲しみに貴族的なものはありません。悲しみは極めて平等です。楽に抜け出せる道などないのです。

勇気は第一のステップですが、ただ勇敢に、打撃に耐えるだけでは十分ではありません。ストイックであることは勇ましくはありますが、長い道のりの中間点でしかありません。それは、盾であり、短い時間しか使えません。最後には、人は盾を捨て、無防備にならなければならないのです。そうでなければ、瘢痕組織が創傷を被覆し、そこには何もそれ以上成長しません。成長するために、生まれ変わるために、人は無防備になって、愛を受け入れ、そして、また恐ろしいほどのもっと大きな苦しみの可能性をも受け入れなければなりません。

後悔はもう一方の行き止まりであり、まやかしの行為であり、その時には、そうするしかないかのように見えるものです。起こった後で、何事も「起こらなかった」かのように振る舞うのも無駄な試みです。（「わ

たしがああしなかったら、こうならなかったのかもしれない」と、後悔することは、自分をだますことであり、幻にすぎることですが、それは、思い出の中に生きて、形見や写真にしがみつくことが幻であるのと同じことです。夢の中で出された食べ物のように、栄養にはなりません。そこからは、成長も生まれ変わりも起こらないのです。

人生の中で、とくに悲しみの中で、容赦なく厳しいのは、真実と向きあうことです。ローレンス・ヴァン・デル・ポストがこのように書いています。

「我々人間のもっとも哀れなことのひとつは、真実は、それだけでは十分ではない時があり、『もっと良いものにすることが出来れば』、または、『しなければならぬ』といじらしく信じることである。私達は、一度完全に打ちひしがれなければ、真実を改善することなど不可能だとは、気がつくことが出来ないのだ。我々が拒むのは真実であるが、実に優しく、寛大にかけらを拾い集め、もとの形にしてくれるのも真実なのである。」

苦しみ、洞察、治癒、生まれ変わりの長い道のりは、キリスト教でのキリストの苦しみ、死、復活によって、一番わかりやすく説明することが出来ます。同じことが、釈迦が子を亡くした母親に対して与えた言葉についての逸話にも描かれています。釈迦は、

「癒しを得るためには、これまで悲しみに出会ったことのない家から、^{からし}芥子の種を一粒だけもらいなさい」

と語ったといいます。母親は、家から家へと世界中を旅して回りましたが、悲しみに出会ったことのない家などはありませんでした。その代わりに、母親は譬え話と釈迦の説法のパラドクスの中で、真実、理解、哀れみを見いだし、そしてやがては、生まれ変わるということがはっきり

とわかります。

しかし、悲劇と、それから抜け出ための長い道のりについて言い尽されたところで、自分以外にも例があることを知って、何になるのでしょうか？ 私に言えることは、人は他の人々が試練をどのようにくぐり抜けて来たかを知ることによって救われる、と信じていなければ、私に起こったこのことを公けにすることなど耐えられない、ということだけです。

私は、他の人々の経験を知って確かに力づけられました。人の犯した間違いを知ることも、役立つことさえあるのです。読者はおわかりになるでしょうが、私は、偽りの道を通りもしました。ストイックであったり、傲慢になったり、悔やんだり、自分を哀れんだり、思い出の切れはしにしがみついたりしたのです。これだけではありません。まだまだあります。私は、そのほとんどをやってみました。私達の場合、苦しみに恐怖が加わったということが、基本的な性質を変えることはありません。確かに失ったものの上に、犯罪、恐怖、事故が上塗りされることは苦しみを増しますが、私にわかってきたのは、それは心の癒しが遅れるからなのです。心の癒しが遅れると、それからの「長い道のり」となる、喪に服したり、現実と直面したり、無防備のままであり続け、やがて訪れる〈生まれ変わり〉という普通のプロセスから、その人を遠ざけてしまうのです。

心の癒しを願って

私自身の回復は、回りの人々の愛情と理解と支えによって大きく助けられた、と実感しています。しかし、私の前を歩み、その証言を、暗い道を照らす光として残してくれた、会ったこともない多くの友人達のお蔭でもありました。感謝の気持ちとして、私の後に続く人達のために、

私の旅についての証言である、私自身の記録を残します。

別の作家が書いたように、「それが結局は、残さなければならない唯一の宝、財産——我々のひとつの小さな真実なのです」。心に、あるいは日記帳に閉じこめられた真実は実を結びません。それを、命のあるところに戻すことによって、私以外の人々の失意の時を変えなければならぬのです。

10年が過ぎ、私達家族の悲劇が過去のもものとして、土に埋められ、新しい生活によって覆われるようになった時、私が経験したこの変化を表わす詩を書きました。それは、無意識のどこか奥底から、完璧な姿ですつくと地面から伸びてきた洞察の若芽のような詩です。この日記の何年も前に書いたものですが、それは、私がこの序文に続くページで書こうとしたことの本質を表わしているものであり、この序章の締めくぐりに相応しいものだと思います。

二度目の種蒔き

誰のためのものだろうか？

乳房の中の乳は

子供はもういないのだから

誰のためのものだろうか？

心の中に閉じこめられた愛は

そこにとり残されたまま

あの金色の収穫は

かつては、ひび割れた土地の、8月の畑にあふれんばかり

9月の床での苦しみの中で、脱穀はすみ、

〔3頁めの抜粋及びこの頁の「二度目の種蒔き」は、アン・モロウ・リンドバーグの詩集『ユニコーン』（1948年）に掲載されている。〕

今は納屋に高く積まれたままの不毛の備え

かんぬき
門をはずし

袋を破り、穀物を取り出し

不毛の土地いっばいに、たっぷりと蒔こう
つちくれ
土塊の土のひびをことごとく覆うように

心だけでは収穫はない

永遠に

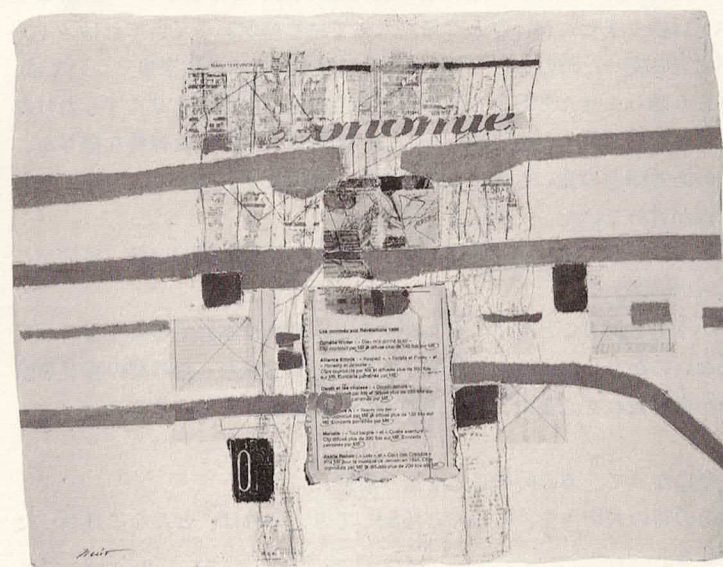
愛の種を

繰り返す蒔かなければ

1973年

1932年

26歳



佐野 めい

Le Figaro F1

水彩・コラージュ・紙 40.0×52.0cm

1932年1月〔母宛の手紙〕

エングルウッドにて

愛するお母様

申し訳ないと思いつつ、お手紙を差し上げませんでした。今まで執筆したものといえば、ほとんどがあの旅に関する事です⁽¹³⁸⁾。あまりペンは^{はかど}捗りませんが、ひとつ気に入っている章があって、それはメイン州に立ち寄った時のことです。家族のことや起こった出来事については、あまり触れませんでしたし、お別れの時の様子も書きませんでしたけれど、ただ感情にまかせて書いたので、感情をともなった純粋な描写が、味のある印象の強いものになればと願っています。つまり、エイミーおば様が言っていた、

「エドワード・ホッパーの絵に描かれた古い納屋の両脇には、感情がこもっている」

というのと同じことです。もしかすると、それは本にするようなことではないのかもしれませんが、あの24時間で味わった最高の喜びを幾分か書き表わすことに、私はこの上なく満足を感じたのです。

今になって、あの時のことを振り返り、

「あの時の大切さを、ちゃんと感謝してさえいれば、どんなに良かったかしら」

などと言わないですんでいるのは、あの24時間をあの時⁽¹³⁹⁾に私がとても大切に感じていたからだと思いますが、これはなんて素晴らしいことなのでしょう。私は感謝しながら、あの24時間を過ごしたのです。あれは、滅多にないようなことで、自分自身の喜びの感情に気付いていただけでなく、どういうわけか、生涯の感謝の気持ちが、あの時あの時点に奇跡のように総て凝縮され、残りの希薄な時との調和をとったのでし

(138) アンは、やがて『東方への空の旅』(North to the Orient)の題で出版される事になる、前の年の夏に行なった飛行のことを書き始めていた。

(139) アンが東洋に向けての飛行のはじめに、メイン州で実家の家族に別れを告げた時の事を指している。彼女が父と会ったのは、

た。——まるで忍^{すいかずら}冬の花一輪で、夏の蜜のおいしさ全部を味わってしまった蜂のように！

あの気持ちを再現したくて、オタワから出した手紙にそれが書いてあれば……と、お母様の引き出しから手紙を取り出しました。何かが書いてあったとお思いですか？ あの詩だけでしたわ。

しかし、私達は彷徨いながらも、
そんなにも美しく激しい生命の意義を
見出すのだ、
私達がここからさすらい出ても、それはそのまま生き続け、

あとから続く人達が、
たとえその^{ゆくえ}前途が真っ暗で見えなくとも、
その背には感じる、
私達の歓びを、心の砦を。

ジョン・メイスフィールド^{*47}

私は、何て変なことをしたのでしょう。

1932年2月7日 日曜日〔義母宛の手紙〕

ホープウェルにて

親愛なるお母さま

チャールズ・ジュニアは、逆立ちをして、両足の間から逆さまに私を見ようとするのですよ！ 私がこのところ書くものといえば、ふたつのものばかりで、書くのがすっかり嫌になってしまっています。

1) チャールズが、「中国洪水救済」についてラジオで話をするよう頼

これが最後であった。

*47 イギリスの詩人 (1878~1967)。船員となりアメリカを放浪した。海的美を歌う詩人として有名。1930年に桂冠詩人となる。この詩は、286頁の詩の一部で、『素晴らしい未知なるもの』より。

まれたのですが、私にやるように言うのです。もちろん書いたものを読み上げるつもりです。それでも、うなされそうに憂鬱です。

2) チャールズが(というより、私達二人なのですが)、あの東洋への飛行のことを是非書くように言われていて、彼は私に書くようにと言うのです。そうしようと思っているのですが、このことは誰も知らない話で、誰とも何の約束もしてはいないのです。もし、あまり遅くならないうちにある程度書いて、まああの出来でしたら、出版社に話してみようと思っています。その間、当分、たとえばお悔やみの手紙への返事などは、もう完全に放りっぱなしです。でも、お母さまへの手紙は書きやすいのです。ただ、お知らせしたいことが多すぎて。

チャーリーは、たくさん話せるようになりました。言ったことを何でも真似するのです。私の具合がずっと良くなったので(もうどこも悪くありません)、前よりあの子の世話もやけますし、私に慣れてほしくて、もうプリンストンへはベティ⁽¹⁴⁰⁾を連れて行っていません。

「ベティー」

ではなく、

「マミー」

と呼ぶ声を聞くのは、それは嬉しいものです。ベティも私の気持ちをよくわかってくれて、協力してくれるのです。(「はい」の代わりに)「うん」はとてもはっきり言えますが、かなりきつい言い方で、明らかに私に似たのでしょうけれど、それをしたくない時にはきっぱりと「いや」と言います。やや鼻にかかった声で、ちっとも怒ってはいないのですけれど、したくないことはしたくないと、はっきりしているのです。これは、絶対にスウェーデン流のきっぱりした「いや」なのでしょうね。そのうちきっと、その後に

(140) ベティ・ガウ。チャールズ・ジュニアの子守り。

「もう、ボク、おうちかえる」

などと言うようになるのでしょう。大きいチャールズと小さいチャールズはとても仲よくやっています。

チャールズ 「たかいたかい、やろうか？」

チャーリー 「うーん。」

チャーリー (空中で)「おんり！ おんり！」

チャールズ 「もっと？」

チャーリー 「イヤ！」

チャールズ 「ブランコは？」

チャーリー 「うん！」

チャールズがブランコの後、あの子を下におろすと、

チャーリー 「もっと！ もっと！ もっとオ！」

この間などは、ふたりで枕をぶつけ合い、チャールズの方は、坊やに枕をぶつけて倒してしまったのですが、あの子は笑っただけで(これには、チャールズもすごく驚いて、すっかり感心してしまったものですが)、なんとか枕を拾うと、父親にぶつけようとしたのです。

チャールズは、2週間も西に飛行出来ないと言いますし、すぐ帰ってくるつもりです。それから、ずっとここにおります。夏はどうするか、わかりません。母や姉、妹は、外国に行く予定です。私は、8月とたぶん7月もずっとプリンストンか、エングルウッドにいないべきではないでしょう⁽¹⁴¹⁾。

もうひとりの赤ちゃんのことは、とても本当の気がしません。想像も出来なくて、お母さまが下さった可愛い毛布を、すぐチャーリーのところ

(141) アンは、8月に第二子を出産の予定であった。

ろへ持って行ったのですが、あの子は前にいただいたのを、まだ3枚も持っていることに気がついて、私はふと、

「もしかしたら、お母さまはお腹の赤ちゃんに下さったのかしら」
と思ったのです。もしそうだとしたら、今度生まれる男の子（あるいは女の子！）の最初の持ち物になるわけです。

ウォルター・ウィンチェルが、ラジオで3ヶ月か4ヶ月前に、私に赤ちゃんが生まれると発表したことをご存じですか？ まだ何もわかっていない時でしたわ。私がチャールズと一緒に、南アフリカに行かなかったからなのです。行かなかったのは、父の亡くなったすぐ後でしたし、あまり騒ぎたてられなくなかったからなのです。会社としても、あのよ
うな時に私に出かけられるのは、体裁が悪かったと思いますし……。

ワグーシュとチャーリーは、部屋中追いかけて、にぎやかに遊んでいます。ワグーシュは、本当に人間のようです。

あの子は、お母さまからいただいたオルゴールのネジを自分で巻いてしまいます。象が気にいって、「ゾウ」という発音に似た声を出すのですが、やっぱりあの尻尾が平らの灰色の猫の方がいいらしくて、夜いっしょに寝ていますわ。

チャールズのことは、いまだに「おい^{ハニー}」と言います。そろそろやめさせて、もう少しちゃんとした威厳のある呼び方を、と考えております。先日、ニューヨークで後ろの車に追突されてしまい、テールランプやら、フェンダーやらを潰されましたし、燃料タンクからガソリンも漏れてしまったのです。屋根に乗せてあったバッグは全部（プリンストンに向かう途中でした）、車の前に落ちてしまいました。私は坊やを抱きかかえました。運転手達が怒って、車から出て、それぞれの言い分を主張しよう

としている間、私達は車を停車していました。チャールズは車から降りて、ドアを勢いよく閉めました。すると、小さな甲高い声が後の座席からして、悠々と言うではありませんか。「おい^{ハニー}、なーいない！」

誰も怪我はしませんでしたし、これくらいしか、子供にとってコメントに値することはなかったのでしょうね。（チャールズに、いつまで書いているのか、と言われてしまいました。ごめんなさい！）

1932年 3月2日 水曜日

ホープウェルにて

（読み終わったら、処分して下さい。）

私が知っていること総てと、新聞に出るかもしれないことを、今とりあえずお知らせします。でも、公表しないことになっていることもいくつかあるので、お母さまはいつもそうして下さいますが、今回も他所にはおっしゃらないで。私だったら、是非知らせてほしいと思うことを、電話では話せないの、全部書くことにします。昨夜、大変なことが起こったことだけお伝えして、あとは何も言わなかったのは、それは辛かったです。でも、チャールズがすぐにお母さまのことを思いついて、連絡をとるように言ったものですから……。彼と刑事たちは慌ただしくしていました。

7時30分、私とベティは坊やを寝かせました。歪んでしまって閉まらないひとつの窓以外は、錠戸を全部閉めて、鍵をかけました。それから私は、階下において、居間の椅子に腰掛けました。ベティは7時45分か8時まで、浴室などの掃除をして、子供が毛布をはいていないかどうか見に行きました。彼はとっくにぐっすり眠っており、毛布はかかっていました。それから、ベティは夕食をとりて下へおりました。

この日、チャールズの帰りは遅く、8時20分でした。そして、私達は、二階にあがりました。チャールズは、子供部屋の隣のバスルームで手を洗いましたが、その時は何も聞こえませんでした。でも、水音で聞こえなかったのかもしれませんが。8時35分くらいに、夕食のために階下におりて、9時10分までいました（この時ベティは、まだ夕食を食べていました。私達は皆、家の西棟にいました）。9時10分に、チャールズと私は上に行きました。チャールズはお風呂に入って、それから階下に行きました。続いて、私がお風呂に入りました。音は何も聞こえませんでした。9時半頃から10時までの間、チャールズは子供部屋の下にある書斎の窓のそばにいました。その時に、梯子がかけられた筈はないのです。ベティとエルシーはまだ西棟で、この時はその上の階にいました。

10時に、ベティは坊やを見に部屋へ行行って、まず窓を閉めて、それから電気ストーブをつけ、そして、ベッドをのぞきました。空っぽで、ベビーベッドの柵はあがったままでした。毛布はそのままありました。チャールズが、ふざけて連れて行ったのかと思ったそうです。私も、チャールズの顔を見るまでは、そうかと思っていました。明らかに、犯行は1時間半ほど前に行われました。あとのことは、公表されていない少々の証拠を除いては、知っていられっやることでしょう。

1 明らかに窓の高さにぴったり合うように作られた梯子が、家の左方で発見されたこと。

2 錠戸に鍵がかかっていない窓の枠に、泥がついていたこと。

3 「子供は大事にする」また、「3つの包みに分けて数千ドルを支払うように、4日以内にお金を置く場所を指定してくる」と書かれた手紙があったこと。梯子、ベッドカバー、窓、手紙を触った人物は手袋をしていた、と専門家は言っています。

さらに、窓の下には、足跡があったこと。私達が、平日なのにホープウェルにしていると知っていること。去年からずっとしていなかったことだけれど、あの子が風邪をひいていたのでここに残ることにしたのです。でも、月曜日も火曜日も熱がなかったし、火曜日はもう治っていたのです。水曜日には、エングルウッドに連れて行くつもりでした。

子供部屋の場所を知っていたこと、指紋が残されていないこと、びつたりの長さの梯子を使ったこと——は、どれもプロのやり方で、それは、目的がお金で、子供に危害は加えないということになるので、幸いなことなのです。

精神異常者だったらどうしようと、思っていました。でも、この綿密な計画をみると、その可能性はないようです。チャールズも、ヘンリー・ブレッキンリッジ大佐も、刑事さん達もとても楽観的だけれど、時間と忍耐が必要だと考えています。実際誘拐犯は、これほどの圧力、国中にはりめぐらされた捜査網、私達への深い同情、マスコミの騒ぎ、警察の力の入れよう——と、すごく面倒なことに足をつっ込んでしまい、これでは、子供はこのまま危害を加えずに返すしかないと考える、と思っ

私が知っているのは、これだけ。この手紙を誰かに持ち出してもらるように、大急ぎで書きました。チャールズは立派です——落ち着いて、明瞭で、注意深く、観察力があって……。私は、何の役にも立てないのがつらいのです。とても役に立ちたいのに……。お母さまも同じ気持ちなのは、わかっております。チャールズにもわかっています。電話でのお母さまのお気持ちをありがとう——お母さまが、口にこそ出さないでいて下さいましたが、私にはよくわかりました。

こんなに簡単な説明でごめんなさい。愛をこめて。

1932年 3月3日 木曜日 朝

ホープウェルにて

お母さま

情報が少なくて申し訳ございません。お金を置くところを2日から4日の間に知らせると言ってきた、誘拐犯の動きを待っているところです（これはもちろん内密の話です）。今は、犯人は本物のプロではないのではないか、本物のプロだったらこんな面倒を引き起こすようなことはしないし、手紙の文面がプロにしては凄味が足りない、という見方になっています。それに、この辺りのことやわが家の状況に驚くほど詳しいことから、地元のギャングの仕業では、との見方も強まっています。犯人は近いうちに、この大きな圧力に屈するのではないかと、つまり、交渉を始めるか、さもなければ、怯えてとても交渉などしようとしな、と見られています。でも、あの子を手元に長くおけばおくほど、彼らは一層不利になる、というのが大方の見方です。

チャールズは、昨日の午後少しだけ横になり、夜はぐっすり寝ました。でも、ひどく疲れています。それでも、大変落ち着いていますし、機敏で判断力もあります。新聞で、お母さまが教職をお続けになることを知り、喜んでおりました。

誘拐された時、ワーグーシュは家の反対の棟にいて、吠えませんでした。あの風の音では、あんなに離れた場所の音は聞こえなかったはずで、す。あれからは、ずっとワーグーシュは吠え通しですけど……。

家の中は騒乱状態です。何百人もの人が、ドスドスと入って来ては出て行き、階段であろうが、食料庫の流しであろうが、いたるところに誰か座っているのです。昼夜を問わず、電話は鳴りっぱなしです。皆、床に新聞紙や毛布を敷いて寝ています。これほどの犠牲的精神もエネルギー

も、私は見たことがありません。ジャージー警察署の署長⁽¹⁴²⁾は、事件が起きて以来、睡眠もとらず休んでもいません。ヘンリー大佐は顔色が冴えません——精神的に疲れきっているのです。

マスコミは、ホープウェルの町の方に移り、ここの写真はもう撮っていません。お蔭で、私達は散歩をすることが出来ます。これは、私にとって大きな救いです。ワーグーシュはチャールズについてまわり、チャールズも気分が変わり、楽しんでいると思います。現在頭の上には、飛行機が何機か飛び回っています。

もっといろいろお伝え出来ると良いのですが……。ただ待っているだけなのは、とてもつらいことですわ。お母さまもさぞお疲れでしょう。たとえ何も出来なくても、その場にいる者の方が楽なものですわ。今の私の立場がそれです。

1932年 3月3日 木曜日 午後

ホープウェルにて

お母さま

捜さがどこまで進んでいるかは、新聞には出ていません。ということは、刑事たちは違っていると証明された手がかりだけしか公表していないのでは、と私は思います。これだけ公けに「通常の」手がかりの追跡が行なわれている一方で、他の筋からも3つか4つ秘密裏の捜査が行なわれているのです。

そのひとつに昨夜急展開があつて、その方面からの動きが本当に活発になっているのです。犯人との（出来るだけの）交渉に向けての動きが確実なものになり、その結果、子供が無事だと言う確証が持てる、即ち、無事に返される希望がずっと大きくなる、ということです。これ以上のことは申し上げられません。

(142) チャールズとアン夫妻が絶対の信頼を寄せていた、ニュージャージー州警察署所長、H・ノーマン・シュワルツコフ本部長。

こんなにお伝えしない方が良いのかもしれませんが、私が知っていて、お母さまがどれだけ情報を待ち望んでいらっしゃるかわかっているからには、お伝えしないわけにはいかないのです。状況はもちろん、大変大変微妙です——時間と粘り強さと忍耐を、たくさん必要とするものです。

でも、昨夜と今晚のチャールズの変わりようをご覧くださいたいのです。まだ、緊張も心配もしてはいますが、元気で明るくなっています。ヘンリー大佐もです。絶対に、坊やを無事取り戻すという目的に向かって動いているのです。

このくらいにしなければなりません。でも、どうか新聞記事を読んで落胆なさらないで下さい。もっとも望みが大きいものは、静かにしか進んでいませんから。チャールズは昨夜は割合よく眠り、昨日までの風邪も治りましたし、元気になりました。私も元気ですわ。

手紙が毎日700通以上も来るものですから、お母さまがチャールズにも私にも、お手紙を下さっていなければよいと思います——いずれは、私達のところに届きますが。今は全部刑事が目をとおします。でも、母宛てにして⁽¹⁴³⁾、お母さまのお名前を封筒の表にはっきりお書き下されば、お手紙を下さってもかまいませんわ。

1932年3月5日 土曜日

ホープウェルにて

お母さま

今、申し上げられることは、昨日書いたことが、もっと確実になっていることだけです。チャールズですら、(彼は、自分が何か最もらしいことを言って、私がそれにすぎるようなよい期待を持ってしまうことを恐れて、何も言いません) 今日は何か自信をもって話してくれました。

(143) アンの母は、娘に付き添うためにホープウェルに移っていた。

あの子も元気で、ちゃんと世話をして貰っていることもほぼ確かです。「勿論、実際に見るまでは解らないけれど、うまくいきそうだよ」と、彼は言っています。なかなかことは進みませんが、坊やを取り戻す方向には動いています。今夜は昨夜よりも、そして勿論、最初の二日よりも、希望が持てるようになりました。

チャールズの言葉よりも、彼の行動や態度でもっといろいろなことが解ります。最初の二日間はどのような状態でも、うっかり話しかけるのも恐いほどでした。いつもよりも興奮はしていますが、この二日で自分を取り戻したようです。

毎日、言葉では表せないような混乱状態が続いています。昼間は、階下に警察官の立入り所が設けられ、刑事や警察官、秘密警察官が大勢出たり入ったりしています。夜になると、食堂や他の部屋はマットレスが敷かれ、足の踏み場もありません。いつ何時でも構わず、刑事達が会議を開くために、私達は眠っているところを起こされ、部屋を開け渡さなければならぬのです。あまりにも、信じられないような毎日で、もう何も感じなくなっていました。

今朝、お母さまからのメモを見て、ベティはとても喜んでいました。彼女も警察の尋問や批判を浴びていて、疲れ果てているところで、丁度良い時に届きました。彼女は本当に誠実な人です。

チャールズも、昨夜はよく眠れました。

1932年3月6日 日曜日

ホープウェルにて

お母さまへ

昨日、「新聞が書くことを、鵜呑みにお信じにならないように」と書

きましたが、今日の朝刊には正確で、また希望の持てるニュースが伝えられています。私が手紙でご説明するよりも、遙かに詳しく書いてありますので、このお手紙は新聞の内容の確認ということになりますが、暗黒街では最も重要な二人の人物との申し合わせが出来ました。彼等は暴力団に対する大きな影響力をもっており、それとは直接の関わりもなく、彼等の行動にも関与していない人達です。私達には、あの子がどこで誰といるのかはわかりませんが、プロの仕業だと皆意見が一致していますので、その道のプロに協力して貰うのが得策だと思います。この二人も、あの子は無事保護されていると信じているようです。無事戻って来るまでには、時間がかかると思います。だって当然のことですが、敵だって捕まるような危険なことはしませんもの。それに、警察官や報道が静かにしてくれなければだめなのです。——彼等が動き出すには、新聞の見出しが消えないと……。

チャールズは元気を取り戻して来ており、昨夜はぐっすり眠りました。私は昨夜、例の暴力団のボス達に会いました。チャールズも、ヘンリー大佐も、私も、彼等は正直な人達できっと協力してくれると信じています。ここへ陣中見舞いで訪ねて来られた政治家よりも、ずっと誠実に思いやりを示してくれました。不思議でしょう？

ホワットリーもエルシーもベティも、働きづめでヘトヘトに疲れています。私達は皆、本当に疲れました。でも、彼等はとても元気ですよ。

1932年3月7日 月曜日

ホープウェルにて

お母さま

今朝、朝刊にこう書いてありました《仲介者、失敗に終わる》。そんなことを言われるなんて、気の毒ですわ。新聞には失敗したかどうかは

わかるはずはないし、永遠にわからないかも知れません。まだ判断するには早過ぎます。勿論、何が何でも成功させなければと、彼等は一生懸命です。それは、私達も良くわかっています。この前のお手紙にも書きましたが、世間がもう少し静まらない限り、この事件は解決されないと思っています。ただ、あの子の無事は確認されています。大丈夫と解っていないが、いつまでもじっと待たなければならないのは疲れます。

もう何年経ったように感じます。私もとても老けてしまい、疲労困憊して心身共にボーッとしています。でも、チャールズもヘンリー大佐も、楽観的で積極的に動いています。物事は進展していますから、耐えなければなりません。

新聞が何を書いても、チャールズと私の健康のことは心配なさらないで下さい。チャールズも私も、ひどい風邪をひいていましたが、チャールズは殆ど治っていますし、最初の夜以外は良く眠っています。彼は、疲れも見せず働いていますし、明るく生き生きとしています。私も大分良くなりました。風邪が治ればもう大丈夫ですわ。

何だか総て嘘のようです。でも、嘘でいいのです。本当のことは考えたくありませんもの。お腹の赤ちゃんは、もう流産や合併症の心配はなくなりましたし、食欲も出てきて、睡眠もほぼ普通にとっています。異常な痛みもなく、吐き気さえありません。すっかり落ち着きました。

1932年3月8日 火曜日

ホープウェルにて

お母さま

この頃、チャールズとは殆ど顔を合わせません。彼は一日中刑事達と部屋に閉じ込められているか、夜は遅くまで電話で話しています。夕べは、彼はヘンリー大佐の部屋に寝て、アイーダ（ヘンリー・ブレッキンリッジ

夫人) がここで寝ました。彼女は、外部から私を守ってくれる盾になってくれています。時々、私の代わりに電話の応対もしてくれています。この事件にたずさわっている州警察官、巡査、刑事の皆さんは、私達のために本当に献身的に力を注いで下さっていますが、私の今までの人生の中で、これほどの献身的な熱意を見たことがありません。ヘンリー大佐は六日間、殆ど眠っておられません。すごく心配です。チャールズも、ヘンリー大佐の判断に総てを委ねています。

今は、苦難の日々です。皆、ものすごいストレスを感じています。最初の勢いもなくなり、一番活躍していた人達も、もう潰れそうです。チャールズは時間をうまく使い、他の人達よりも睡眠をとっています。つまり、つまらないことにはエネルギーを費やさず、非常に厳しく正しい判断をもって自己管理をしています。(今のような非常時には必要なことです。)

状況は何も変わっていません。遅々として進まない、苦しい戦いですが、皆最後には成功するという確信を持っています。自分達が何をしているかを解っていますもの。

1932年 3月9日 水曜日

ホープウェルにて

お母さま

ただ、ただ皆待っているということ以外に、今日もあまりお伝えすることはありません。

新聞も前ほど騒がなくなり、警察官の人数もずっと少なくなりました。動きは誠にゆっくりです。何もすることもなく、じっと待っているだけでとても辛いです。しかし、男性達はまだ望みを高く持っています。「子供は無事」と信じながら、事態が静まるまで待たなければなりません。男性達にとってこの小康状態も悪くないと思います。今のうちに

睡眠をとったり、運動も出来ますから……。

チャールズは今朝はゆっくり寝て、散歩に出ました。私達二人共、風邪はすっかり良くなりました。

家の中も少しずつ片付けています。エルシーもホワットリーもベティも、少し時間の余裕が出来ました。警察からコックさんが来られました。ワーグーシュは、ニュージャージー警察のペットです！

今のような静かな時には新聞、特にタブロイド新聞は、いろいろでためな記事を刻々載せています。お母さまもご承知の通り、嘘ばかりです。このような間違った情報に絶えず左右され、間違った期待や解決の糸口を、お母さまが抱かれることを懸念しています。ニューヨークのタブロイド新聞は、毎晩“号外”として子供が見付かったと報道しているそうです。でもここでは、子供が返されるまで地道な“取り引き”が続けられることと思います。誘拐者にとっても騒ぎが取まらなければ、動くのは危険ですから、それまではダメでしょう。私達も、何千通の手紙や新聞の記事や論説を通して、全国の何百人もの方々から同情と憤りの気持ちを届けていただき、とても元気づけられています。

1932年 3月10日 木曜日

ホープウェルにて

お母さまへ

お母さまのお手紙は、モロウの母宛に直接お送りになられた方が良いと思います。郵便局は(今)私の名前だけ見て、他の何千通もの手紙も一緒にホープウェルに送ってしまうようです。まあ、わざわざそこまですることもないかも知れませんが……。

今は、何をしても仕方がないように思えます。

私は子供が生まれてから育児記録を作ろうと思っていましたが、11月

から中断してしまっています。12月・1月は、みじめな辛い時期だったこともあって……。お母さまには何通かお手紙を出しましたね。お母さまが手紙をとっておかれるかどうかわかりませんが、私は普段は、手紙は取っておかない人間で、どこかへ失くしてしまいます。でも、もしお母さまが取って置かれていて、11月・12月・1月・2月の私の手紙の中に、あの子のことについて何か書いてあれば教えて頂けますか？ 私の記憶が新たになるかもしれません。

今日もここではいつもと同じで、何も変化はありませんでした。

1932年3月12日 土曜日

ホープウェルにて

お母さま

チャールズはゆうべは殆ど眠れませんでした。昼間、数時間眠りました。彼も私も元気です。

お聞きになりましたか？ 昨夜、マディソン・スクエア・ガーデンでは大きなボクシングかホッケーの試合が中断され、全員3分間起立して坊やが無事帰るように祈ったそうです。——あの広いマディソン・スクエア・ガーデンにいたたくさんの人が、皆静粛に祈って下さったのです（チャールズの飛行の時と同じように）。こんなにたくさんの人達が、私共のことを心を一つにして心配して下さるなんて、感激です。

1932年3月16日 水曜日

ホープウェルにて

お母さま

今日は、素晴らしい春の日射していっぱいです。

午前中ずっと外に出ていたお蔭で、気分がすっきり致しました。皆、

「あの子は大丈夫、無事帰ってくる」

と、言って私を安心させてくれています。忍耐との勝負です。誘拐者にとっても、今が最も危険な状況にありますので、このように長い間待機しなければならないのも仕方がないと、皆思っているようです。勿論、絶対安全という保証がない限り動けないということは、容易に理解出来ます。ただ、じっと座って待つのは我慢と忍耐の連続です。特に、チャールズのような活動的な性格の人にとっては苦痛ですが、彼は立派に受け止めています。

また、関係者も皆さん適切な対応をとって下さっていると、私も信じています。今回の事件に関わって下さっている方々の、このような誠意のこもった献身的な救助活動は類のないものだと思います。

お母さまの所では、報道関係者がきつと付きまとっているのではないかと、心配しています。それは、ほんとうに余計な心身のストレスになります。ここでは、報道陣は3キロ程離れた所で待機しているので助かります！ それも、警察の監視と協力があるからです。（チャールズが、お望みなら護衛を頼むとか、何でもお母さまにとって一番良いようになさったら、と言っています。）しかし、きちんと礼儀をわきまえている新聞社は、私達の気持ちを考えて協力的です。他の事件と比べると、私達は素晴らしく恵まれています。

チャールズは、希望を失っていません。毎日々々、3000から4000通の手紙が届いています。

1932年4月6日 水曜日

ホープウェルにて

お母さまへ

昨日、ここでかなり大きな火事がありました。南側の窓から見える、

並木の向こうの畑の右手から火が出ました。かなり風が吹いており、乾燥した長い牧草はまたたく間に燃えましたが、地面も林もかなり湿っていたので樹木には燃え移らず、表面だけですみました。でも、家屋よりも数メートル高い場所で火が燃え上がっていました。チャールズが家は燃えないと怒鳴っていましたが、窓やドアを全部閉めて灰が入らないようにしました。

石造りで良かったと思いました。(チャールズが正解でした。私は、木造の家がすごく欲しかったのです) 約200エーカー程燃えましたが、チャールズは「樹木も殆ど被害を受けていないし、かえて土のためには良かった」と言っています。でも今思うと、とても危険でした。チャールズと警察官は、枝、箒、シャベルで火を消そうとしました。ホワットリーは、素晴らしい活躍でした。こんな緊急の際にまで冷静に機転をきかせ、若い杉の木を切って箒にして、火消しに使ったのです。

チャールズには運動になったし、ストレスの解消にもなってとても良かったのです。いくつか期待はずれのことがあり、これからも事件の解決までには永い時間かかりそうです。その間じっと待つだけですが、あの子は今のところ引き続き無事で、元気だというのが皆の意見です。

1932年4月8日 金曜日

ホープウェルにて

お母さま

ここの新聞は、どれも「事態は非常に楽観的だ」などといって、「子供も、もうすぐ戻るであろう」と書いています。どこからそんな情報を入手して来るのか、わかりません。私達は、近頃は悲観的になっています。ただ、ここにいる人達は、引き続き「子供は無事で元気だ」と思っていることだけが救いです。私達は今はその日、その日のことしか考え

ずに生活していますが、やはり数週間先を見ながら暮らさなければいけないとも思っています。

先週は緊張の一週間でした。今週になってひどい期待はずれがあり、とても辛いです。でも考えてみれば、チャールズにとって少し休養出来る時でもありました。

警察官の方々が、家の裏の森に射撃練習場を作られたので、チャールズも一緒に行っては練習をしています。

今は手紙も一日100通位に減り、電話の回数も少なくなりました。警察官が4月5日までに届いた手紙を、内容によって分類しておおよそのリストを作りました。

見た夢を伝える手紙	12,000通
同情の手紙	11,500通
提案の手紙	9,500通
いたずらの手紙	5,000通
合 計	38,000通

(この中には、個人的な手紙は含まれていません。)

こんなにたくさんの方々が、それぞれの夢を伝えてきてくださるなんて、驚きですね。また、身代金を要求する手紙は、ショックでした。お母さまの所に来たあの男のように、たくさんの人が、何の証拠も、保証も、論理もなく、「身代金をいくら払えば子供を引き渡す」と言って来ています。(こういうのは、総て警察が捜査しています。)

私が、お母さまのお手紙の中に書かれていた噂とか、出来事について話すと、チャールズは必ず「母さんは、うまくやるよ」とか、「そんなこと、母さんは苦にしないよ」と、言っています。

お母さまのお手紙のお蔭で、ここ1ヶ月位のジュニアの育児記録が、

かなりうまくとまりました。

6日水曜日のヘラルド・トリビューン紙に、とても良い短い社説が載っていました。ウォルター・リップマンの書いた《リンドバーグの邪魔をしないで》という題で、内容は、チャールズの「自分の行動の一部始終を報告することはないし、静かに放っておいて欲しい」という気持ちを引用しています。『ヘラルド・トリビューン』と『ニューヨーク・タイムズ』に、その他の新聞も協力的でしたが、タブロイド新聞に記事が出たことによって、こんなに捜査が遅れてしまっていて、これから一体どうなるのか想像もつきません。タブロイド新聞の記事は、誤った情報を伝えただけでなく、実に犯罪行為に等しいと思います。

1932年4月10日 日曜日

ホープウェルにて

お母さまへ

新聞を読まれて、私がお伝え出来なかったことも総て、今ではご存知でしょう。誘拐犯（間違いなく確認されました）と連絡が取れました。5週間も続けられて来た駆け引きの末、犯罪学者や刑事等の助言を受け、運を天に任せて、まず最初に身代金を渡すことに決めました。もし、ここで躊躇したなら、きっと私達は永遠に「何故、みすみす成功のチャンスを見送ったのか」と、自分達を責めることになるだろうから——すぐに、お金を届けるようにと勧められました。

どうなったか、ご存知だと思います。届け先は指定されていましたが、そこでは、あの子は見つかりませんでした。誘拐犯にもその旨を伝え、もっと何か言って来るかと待ちましたが、何の連絡もありませんでした。その後、身代金に使われた紙幣の行方を追跡しようとしたのですが、実に許せないことに、この情報が漏れてしまい、最も難しい作業（誘拐犯に

渡った紙幣の追跡）が、実現不可能となってしまいました。新聞社には、この記事“握りつぶす”ように頼みました。一社だけが他社を“出し抜いて”、第1面に大きく見せびらかすように載せたのです。

もちろん、こんなに世の中に知れ渡ってしまい、誘拐犯があの子を迎えて来ることも、不可能に近くなってしまいました。……多分、大幅に遅れることと思います。

もちろん、そういった可能性は常に考えられますが、チャールズも（他の人達も）チャーリーが殺されているとは思っていません。彼等曰く、「死んだ子供を始末する方が、生きている子供より厄介だ」と言っています。死んでいる可能性もありますが、風邪も治っていたし、丈夫な子でしたので、チャールズは「それはないだろう」と言って、私を「失望しないように」と励ましてくれます。

総てのことをお話ししました（新聞でも全部報道されました）ので、私達の今の状況を解って頂けると思います。私達にとっては、言うまでもなく、厳しい状況になりました。何一つ秘密にしておけないことが、最も辛いところです。状況は悪くても、希望が無いわけではありません。

もっとお伝えすることがあればよいのですが、ここでまた動きが止まってしまう、何か新たな進展があるのを待つばかりです。一からやり直しのようです。ただ、6週間前の時よりも事態は悪化しています。だからと言って、絶望的とは言えませんわ。

1932年4月13日 水曜日

ホープウェルにて

お母さま

もう新聞を読んでご存知だと思いますが、私の方からちょっと確認をします。今までの交渉は、手紙のやりとりと誘拐犯が選んだ仲介者⁽¹⁴⁴⁾

(144) ジョン・F・コンドン博士は引退した元教師で、中立な仲介者の役を申し出て、身代金の受け渡しを行った人である。

を通して行われて来ました。この仲介者は、新聞に自ら仲介役の申し出を載せた人です。誘拐犯は、私達の所にも手紙を書いて来ることがあります。(子供部屋で見つかった最初のメモと手紙を照らし合わせてみると、疑いなく誘拐犯の筆跡です)しかし、私達の方からは、新聞を通してしか連絡を取ることが出来ません。新聞のようなものには、彼等は疑いをもっているでしょうから、これは、私達にとっては不利です。

世間の騒ぎが収まるまでは、私達は行き詰まりの状態です。ここでは、まだトップ・ニュースなのです。

一方では、電話や手紙等から得た情報は、総て毎日追跡調査が行われています。今のところ、何の役にも立っていないようですが、いつか役に立つかもしれません。どんな類い^{なぐ}の情報かおわかりでしょうが、例えば、《ある所で、子供が船に乗っているのが目撃されたが、その子の面倒を見ている人には明らかに似ていない》とか、《ホテルの1室の、ブラインドがいつも下ろされている窓に、子供の姿が見えた》等々といったようなものです。送られて来る情報は、全部調査されています。

チャールズも、お母さまがデトロイトで、どんなにか辛い思いをしておられるか、良く解っています。それなのに、総ての通信手段は盗聴されており、遠くにいらっしゃるお母さまには、チャールズも私も、真の情報が伝えられないのです。今は、どうして良いのか解りません。

本当にお母さまは忍耐強く、懸命な態度をとっていらっしゃっていると思います。

1932年4月18日 月曜日

ホープウェルにて

お母さま

このところ、皆喋り過ぎるのではないかと、私は思うようになりました

た。もちろん、チャールズほど巧みに記者団と接触する人は、他にあまりいなかったと思います。私は、つい彼を基準にして、他の人を評価してしまいます。

こちらでは、ひどい嫌な噂がたくさん流れています。デトロイトではどうなのでしょう。きっと、こことは全く違った噂が飛び交っていることと思います。こんなことをお母さまにお伝えしても無意味だと思いますが、例えば、《昨夜チャールズが、ピストル自殺をはかった》というような噂話まで出ていて、これには二人共憤慨しています。

ミネアポリスのグレッタ・グレイの記事を新聞でご覧になりましたか？
全くのデッチアゲ情報を持って、それから、「お母さまを知っている」と言って、ここへやって来たのですよ。

それで、チャールズが対面する前に、電話で話しました。

C 「こちらは、リンドバーグ大佐の秘書ですが、大佐のお母さまをご存知でいらしたとか……？」

G 「ミネアポリスでね。」

C 「では、夫人がミネアポリスに住んでおられた頃にですか？」

G 「ええ、そうですよ。」

C 「お親しかったんですか？」

G 「いいえ、特には……。でも、ミネアポリスに住んでおられた時には、よくお目にかかりました。」

C 「それにしても、ご存知ないのですか？ 夫人は、ミネアポリスで暮らされたことは、一度もないのですよ。」

G 「えエッ！ 何故、こんなことを私に聞いたの？」

……とうとう、お母さまを知らないし、事件に関する情報も持っていないことを白状しました。

事件に関するニュースは、まだ何もありませんが、希望は捨てていません。少しでも変わったことがあれば、すぐ捜査が行われます。犯人が、私達がどんな反応を示すかを見るために、どんな電話をかけてくるか解りませんし、変な人をここに送り込んで来るかもしれませんので、必ず調べています。ただ、お金を要求してくる人は怪しいと思ってかかりません。どんな金額でも、手渡す前には、完全な身元の確認を要求します。そうすると、「確かに子供を連れ去った人物と連絡をとっている、という証明が出来る物を取って来る」と言った切り、二度と連絡して来ません。

誘拐事件では、よく二重支払いがあるそうです。というのは、最初から2〜3組の暴力団が関わっていて、被害者が二重に身代金を払うように計画を練るそうです。先日、チャールズがそういった経験をしたご両親何人かと話をしてきましたが、2回目の支払い後、無事お子さんは戻されたそうです。

また、最近、4ヶ月も人質にされていた男の子(2〜3歳の子)が、無事家族の元に帰ってきたという話を聞いて、とても嬉しく思いました。

お母さまがいつも「あなた達3人へ、愛をこめて」と、お手紙に書かれるのを読んで、とても悲しくなるのですが、そのお気持ちをとてもありがたいと思っています。

1932年4月25日〔スー・ベック宛の手紙〕

ホープウェル

スーへ⁽¹⁴⁵⁾

メキシコへ手紙を書くのは、もう遅すぎるとは思います。もっと早く書けば良かったけれど、何だか時が止まってしまったような錯覚に陥っていたようです。あまりにもあの事件だけに心を奪われ、他のことから

(145) 学生時代からの友人スー・ベックの事。(12)の脚注参照。

は、一切離れてしまっていたからなのでしょうね。時間の感覚を失ったのか、何週間も、週末になると、あの事件の起こった週末が決して終わらず、いつまでも果てしなく続いているつもりになって、いつも「この週末の事件」と言っていました。

あなたが帰国すると聞いて、とても嬉しいわ。あなたが、モンテ・オルバンの世界にどっぷりと浸かっている様子を、お手紙で読むのがとても楽しかったように、これからは二人でただ座ってお喋りをしながら、モンテ・オルバンの話聞くのが楽しみです。

でも、私からあなたに提供出来る話題は、何もないと思います。このところ、タブロイド新聞とか、気違いじみた手紙ばかり読んでいますし、考えることといったら〈犯罪者のこと〉、話をすれば〈犯罪のこと〉……それだけの毎日で、私の頭は抽象的な問題については考えられなくなっています。実際、私の頭は全然働いていません。

お腹に赤ちゃんがいるから、というのもその理由かもしれません。多少、そのせいで、ぼんやりしてしまうようです。しかし、ぼんやりとしていることは、刑事や州警察官だけとの隔離された不思議な生活や、ひたすら待ち続ける単調さの中でのひとつの救いでもあります。信じられないほど、ひどい毎日で。いつまで、このような生活が続くのか解りません。

1932年4月29日 金曜日〔義母宛の手紙〕

ホープウェル

お母さまへ

捜査の手掛かりが、完全に失敗に終わった時の落胆は、痛いほどよく解ります。「希望を持つてはいけない」と、頭では考え、解ってはいな

がら、どうしても期待をしてしまうのです。私が、今はルーベン⁽¹⁴⁶⁾の手掛かりに頼りすぎていることも解っています。きっと、この手紙がお母さまのお手元に届く頃には、これもダメになっていることでしょう。

私達が今まで期待をかけてきた中では、可能性が低いので、私が信頼している人の殆どが、“たわごと”だと言っています（ルーベンは、多少期待をかけています）。全くの時間の無駄だから、出来るだけ早くルーベンに手を引いてもらって、他のことを始めてもらう方が良いと言っています。

幸いにも、他にも一つ二つ、手を打てることもあります。それに期待をかけるべきなのでしょうが、今身近に見えているこのルーベンの手掛かりに望みをかけてしまうのです。すごくがっかりすることは、百も承知なのに……。ルーベンは時々電話をかけて来て、状況の確認はしていますが、もう10日も行った切りです。

チャールズの記事に付いては、本当です。『タイム』誌^{*48}からの切り抜きをお送りします。チャールズは、ここ1年程暇な時間があると、研究所⁽¹⁴⁷⁾で仕事をし続けて来ました。あそこで、静かに仕事をしている時や他の人が研究している姿を見ている時、彼は本当に幸せそうです。

研究所には、たくさんの友達もいます。私は、物理も化学も生物等も解らないので、初めはあまり本気に考えていませんでした。それに、彼もひたすら隠したがったり、恥ずかしがったりしていました。しかし、お母さまがここにいらした間、彼が二、三度お母さまと科学的な問題の話をしているのを聞き、後で解ったのですが、あれは仕事に関係のあることだったのですね。^{*49}血液の凝固についてと、蠟の特性について、それからある特殊ガラスの話だったと思いますが、憶えていらっしゃるでしょうか？

すごく漠然とした言い方ですが、これが今の私の精神状態を表してい

(146) チャールズ・リンドバークのコード名。

*48 アメリカの代表的な週刊ニュース雑誌。1923年3月に創刊。海外ニュース、科学、宗教等の報道の信頼性に定評がある。

(147) ニューヨークのロックフェラー医科学研究所のこと。チャールズは、同研究所のアレクシス・カレル博士の実験外科部で、

ます。

明らかに関係者から情報の漏洩がありました。シュワルツコフ本部長の下で働いていた人のようです。漏洩は、立証され、追跡され、本人も解任されました。新聞に出ていたあの“ニュージャージーの高官”だったのでしょうか。でも、彼は絶対そんな“高官”ではなかったのですが、チャールズはシュワルツコフ本部長を全面的に信頼しています。とても仕事のしやすい人です。しかし、いろいろ複雑な難しい問題やメディアからの圧力、たわいない嫉妬、政治の干渉等を経験してきている人です。

警官がよく専門用語を使いますが、私はとても気に入っているのです。例えば、「彼女は車輪だ」(She is a wheel.) という「精神病者」の意味で、「きれいな車輪が回っているぞ」等ということです。「単なる蝶」は、「何処にも繋がらない糸口」のこと。必要以上に、たくさんの「蝶」が飛んでいるように思えますわ！

そういえば、モロウの母のことですが、新聞で報道されていたように、ワシントンにはフーヴァー大統領に、アル・カボネ⁽¹⁴⁸⁾の釈放の件について話をするために行ったものではありません。父がその設立にたいへん力を入れていた図書館の開館式に、父の代理として出席したのです。

デトロイトの、お母さまの静かなお家に、チャーリーが戻ってきてくれるといいのに……と、思っています。もちろん、世界中何処だって、戻ってくれば、こんなに素晴らしいことはありません。

1932年 5月7日 土曜日

ホープウェルにて

お母さまへ

ルーベンからは、始終連絡があります。ゆうべ遅く、また、その前の晩にもありました。今のところ、手掛かりはダメになっていないし、搜

臓器還流装置の設計と開発や関連プロジェクトに携わっていた。

*49 チャールズの母、エヴァンジェリン・ロッチ・ランド・リンドバーク夫人は、ミシガン州、デトロイトのカス工業高校で化学の教師として勤めた事があった。

(148) 当時、悪名高きアル・カボネは、所得税の脱税のために投獄

査は順調にいつているようです。もちろん、絶対的とはいえませんが、ルーベンはかなり希望をもっているようです。今回の手掛かりは、彼にしてはかなり楽観的です。彼の方が、ここにいる私達よりもたくさんの情報をつかんでいることを信じ、彼の判断に任せなければなりません。少なくとも、彼が続ける価値があると確信していることに対してだけでも……。もちろん、私自身、彼の判断には絶大な信頼をおいています。しかし、あまり希望を大きくしないようにしています。特に「この連中を信じてはいけない」とでも言っているような証拠が、山ほど出て来ていますので。それ以外には、何も変わったことはありません。

ここは、今とても美しい季節です。花水木が満開で、お母さまにも見ただきたいです。今まで、春にここの景色を見たことが無かったので、あまりの美しさにびっくりしています。わが家の裏の丘は、蒼々としたヒマラヤ杉を背景に、白やピンクの花水木がいっぱいで、美しく映えています。それから、ユリノキの薄い緑の若葉がとても鮮やかです。

中庭へ続く入り口の所の塀にも、美しい小さなピンクの花水木があり、その反対側の塀の中には、可愛い小さな白い花水木があります。テラスから丘の下を見ると、所々に白い花の咲いた桜桃の木が、低い生け垣の間から望めます。野原をお散歩していたら、放置されている林檎や桜の木にも、まだ花が咲いているのを見つけました。森には、すみれが一面に咲いています。

こんなきれいな所に、チャールズもいて、一緒に見てくれたらいいのと思っています。彼はここが大好きで、何よりも楽しみにしていました。私よりも、ずっと前から「ここはきれいになる」と、よく言っていました。でも、もしかしたら、いつの日か春に、皆で一緒にここに来られるかもしれませんね。その時は、皆が幸せな気持ちでね。

されており、地下組織と自分の関係を使って事件の捜査に手を貸す、と提案していた。

1932年 5月7日 土曜日（同じ日付で）〔義母宛の手紙〕

ホープウェルにて

お母さまへ

昨日、チャールズが1ヶ月前にバザーズ湾で探していた船について、お母さまの質問にお応えするのを忘れました。何処へ行けば見つかるか、また、船の詳しい特徴も全部指示を受けて行きました。指定された場所へ行き、2日連続でその一帯を空から探しましたが、船は何処にも見当たりませんでした。以来、その地域全体を船で捜しています。

エングルウッドに関する噂ですが、シュワルツコフ本部長が、ニューヨークとその周辺が活動の根拠地であるため、徐々にここから人員を移しています。トレントンが本拠地ですから、いつもトレントンには人がいます。ここで出来ることは、もう全部終わってしまいました。本部長は、チャールズも「本拠地の近くにいるために、真剣にエングルウッドに引っ越そうと考えている」と、私に言っていますが、チャールズからは何もまだ、その話は聞いていません。それも、良い選択かもしれませんが、私は出来れば行きたくありません。ここにいれば、無駄な毎日ではありますが、自分の家や森があるので、することは充分にあります。

明らかに、もう1ヶ月も、誘拐犯との具体的な連絡が途絶えています。

日記

1932年 5月11日 水曜日

エングルウッドとホープウェルにて

「チビちゃんが帰ってきたのに、彼女ったらキスもしないわ！」

と、誰かが言っているのが聞こえたけれど、私は

「みんな、分からないんだわ。キスよりも、私はただ、チャーリーのフ

ワフワした髪の毛の上に手を置いて、触っていたいのよ」

……そこで目が覚めた。……夢だった。

ヘンリー大佐から電話。あの電話番号からは、何の手掛かりも掴めなかった、という。またもや、行き止まり。

カーティス⁽¹⁴⁹⁾がニューヨーク沖で船に乗っていたことが、新聞に載った。ノーフォークでの失敗の原因。チャールズから連絡なし。

終りのない旅——とても憂鬱。人生の中には瞬間、瞬間で、普遍的で忘れられない質をもった時がある。まるで、ダンテの『神曲』の地獄のように、あの子はベッドから連れ去られ、永遠に帰って来ない。チャールズの強張った表情が、永久に時の中に刻まれる。

何と不思議な愚かなことが起きているのだろう。また聞きや、またまた聞きによって伝えられる話、その登場人物の性格は次々に変貌し、その顔は夢の中のように、お互いの顔の中に吸い込まれるように消えて行く。「私の顔？ 単なるドアの取っ手よ！」

二つの説が現われると、両方とも正しいと証明するために、それぞれの話の照し合わせて信憑性を問う。しかし、意図的かどうかはともかくとして、それぞれの説のどの部分がウソなのかは解らない。いろいろな情報を「これは、あれと符合する」「あれは、これと一致する」と、確認している間は良いが、「彼等の証言から判断すると……」、こうなると、足元から総てが崩れてしまう。

シュワルツコフ氏と長時間じっくりと話し、すっかり勇気づけられた。悪天候のため、港に停泊中とのこと。

(149) ジョン・ヒューズ・カーティス。誘拐には暴力団が関与しているという話を持って来た人物で、メリー・B・モス号という船から行動を取っていたと想像される。

5月12日 木曜日

ホープウェルにて

ホープウェルからマウント・ローズへの街道沿いの森の中で、あの子の遺体が発見された。頭蓋骨・髪の毛・歯型等から確認、頭部殴打により殺されたのだ。捜査によると、証拠隠滅のために、誘拐後すぐに殺されたと考えられるという。その後で寝間着を脱がせ、身の代金の要求に使ったようだ。

最も辛いのは、

「チャーリーは、パパのところへ行っただけだよ」

という母の言葉。デトロイトのお母さまに電話をかけた。私よりもずっとしっかりしておられる。チャールズには、数時間連絡が取れなかった。母の受けた打撃はひどすぎた。——月曜日⁽¹⁵⁰⁾に帰ってきてほしかった。月曜日の悲しみを、和らげてほしかったのに。

総てが、あの瞬間に凝縮されてしまった。永遠に続く時間の中の、ほんの一瞬にあの子が誘拐されてしまい、殺害され、それもむごい殺された方をしたと解ったあの瞬間——恐怖の一瞬——から、これまでのことが現実ではなくなった。総ては煙のように消えて行った。私に残ったのは、あの《永遠の瞬間》だけ。あの時もそうだったし、今もそうである。

私は今では、ただの刑事事件か、ただの殺人事件として見ており、他人事のように興味を持っており、質問をすることも、話題にすることも出来る。また、そうしなければならない。まだ、実感が湧かないが、間もなく自分のこととして、私を襲ってくることだろう。

不思議な平安を感じる。静けさというか、不安からの解放、終焉。まるで、私がお墓の中で眠っているような気がする。

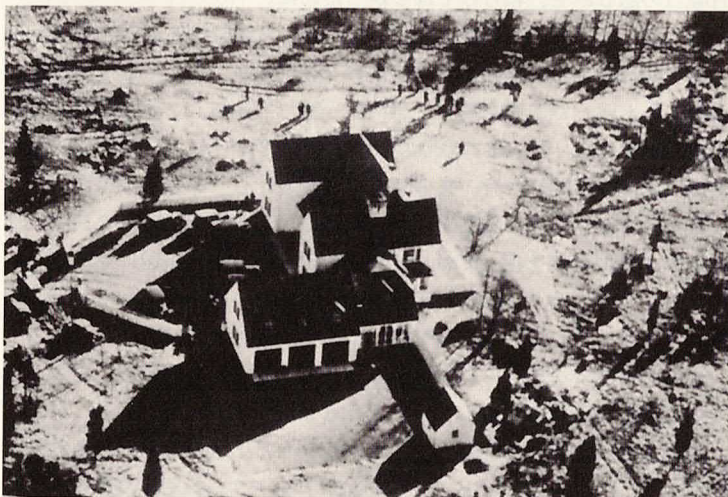
連れ去られた夜、あれから生きていなかったことがわかり、それだけが救いだ。そう考えることで、なんとかチャーリーの思い出をそっくり

(150) 父親のドゥワイト・ホイットニー・モロウが亡くなった曜日。

そのまま残すことが出来る。あの週末、私と一緒に過ごし、私を誰よりも愛しながら去って行ったことだけは、確か。でも、そんなことは私の自分勝手な狭量な考えにすぎない。

しかし、何ごともしっかりすると、ホッとすると。「その時は生きていた」とか「その時はもう死んでいた」と言えるのは、総てが終わってしまったからだ。決着がついたことは、受け入れることが出来る。

チャーリーが誘拐されたホープウェルの家



1932年5月12日〔義母宛の書簡、電話での会話の後に〕

ホープウェルにて

お母さまへ

私の声を聞いて、良い知らせだと思われたことと思います。良い知らせは、目前に迫っているような気がしておりましたのに……。ですから、お母さまにとっては、二重の衝撃だったことでしょう。チャールズと私は、悪い知らせがある時はお互いにすぐに伝えることにしています。新聞には既に、このニュースが伝わっていますので、お母さまにもお話ししなければと思います。お電話致しました。今解っていることを、全部お話し致します。

あの子の遺体は、ホープウェルとプリンスストンを結ぶ街道近くの森の中で発見されました。ベティと私が着せた手製のシャツで身元が確認されました。また、歯型と髪の毛からも確認されました。疑いの余地は全くないようです。頭を強く殴られて殺されました。間違いなく、即死でした。

遺体の状態や、発見された場所がここからとても近いので、殺されてからもうだいぶ日が経っていると思われます。多分、最初は大々的に世間に知れ渡った時に、パニックから殺してしまったのではないのでしょうか。

チャールズは、今船でメイ岬とアトランティック・シティの間にいるジャージー海岸の沖当たりにはいます。今朝7時には、電話がありましたが、その後は、カーティスが折衝していた暴力団と連絡を取るために、二人で出掛けたようです。ああ、あんなにもチャールズは望みを持ち、期待をかけていたのに、彼がこの知らせを耳にすることを考えると、耐えられません。飛行機やクルーザーを出して、連絡を取ろうとしているのですが、まだ取れません。あの暴力団の連中が、何をしているのか解りません。もしかすると、別の赤ちゃんが船にのっているのかもしれま

せん。

今の段階で解っていることは、これだけです。30分か1時間前に知らされた情報です。

お母さまとチャールズほど勇気のある人は、見たことがありません。それは、頼りになる、守りの城壁のようです。お二人には大変感謝しています。今までも、私を助けて下さいましたし、これからも頼りにしていきます。私は何のお返しも出来ませんが、お母さまに対する私の気持ちはよくご存じだと思います。これからは、お母さまと二人でチャールズを助けていかなければなりません。

その後： 夜チャールズと連絡が取れ、2、3時間後にここへ帰ってきます。

日 記

1932年 5月13日

ホープウェルにて

あの子が亡くなって、もう100年も経ってしまったような気がする。

永い眠れぬ夜、チャールズは私の側に座っていてくれる。静かな夜、私は遙か遠くから総てを見ている。彼の忍耐強く、優しい姿、そして沈黙……恐ろしい。「私達にとって、死とは……。」

遺体発見の知らせの後に続く、あの永い一日。私の身の上に起こった総てのことが、洪水のようにドッと私を襲った。私の肉体が失ったもの、私の小さな息子——とめどなく溢れる涙、自制心を失ってはいけなさと、次から次へと起こった無数の出来事を頭の中から消してきたが、今はもう抑さえ切れない。

チャールズはトレントンへ行き、あの子の火葬と毛布の手配をする。

チャールズがそれを全部やることは、短い新聞記事で読むのでさえ耐えられない。最後の週末、チャーリーは病気だったので、私は彼を膝に乗せ、そっと揺すって、歌を歌って……やさしくしてあげられてよかったわ。それに、あの子が最後の数日、私から離れずに、私と一緒にいたかったことが、今はとても嬉しい。

ああ、泣かずに語ることなんて出来ないわ。

生命の輝きは不滅でしょうが、私のかわいい息子の肉体を形造っていたものは失なわれてしまった。

1932年 5月14日 金曜日〔義母宛の書簡〕

ホープウェルにて

お母さま

チャールズは、午前2時頃帰ってきました。ご想像の通り、とても優しくしてくれました。死についてあまりにも美しく、静かに語ってくれ、私にも勇気が湧いてきました。帰ってきてすぐに、お母さまのことを聞いていました。私がお母さまにお電話をしていて良かった、と言っていました。

いろいろ事件のことについて話し合っていた時に、慰めにはならなくとも私達が悔やまないでいられるようなことも、いくつか話しました。あの子は、犯行の夜に殺されたと思われていますから、事件が起こったことを秘密にするように努力しなくても（もちろん、不可能でしたが）、報道を抑えることが出来なかったとしても、身の代金に使われた紙幣のリストの漏洩があっても、どっちみち、何の変わりもなかったのです。どんな努力をしても、頭を殴られて即死しただろうと思います。

「きっと、あの子は何もわからないままだったろう」と、チャールズは

言っています。

もちろん、誘拐犯人は最も卑劣で野蛮で残忍な人達です。そんな人達とチャーリーが、長い間一緒にいなくて良かったと思います。

こんなことを言っても、何の慰めにもなりません。それに、慰めになるものなど、何もありません。それでも、こう考えれば少しは気が楽になります。お母さまにとっても、そうであれば……と思いながら、書いています。

チャールズは、昨夜は一睡もしませんでした。横にさえなりません。皆、今は証拠を突き止めなければなりません。でも、彼は「今夜は眠るから」と言っています。

私のこの手紙は、何か変ですね。何の感情もない手紙となってしまうましたが、今は自分の気持ちをうまく表わせません。チャールズも同じです。でも、お母さまのように勇気があり、立派です。

日 記

1932年 5月14日 土曜日

(カーチスは、すっかりしょげ返り、打ち^ひ拉がれて、一日中車のステップに座り、質問を受けていた。)

長い夜、どうにも抑えることの出来ない激しい感情の揺れに、つい昨日の出来事のように鮮明に蘇る思い出。この悲しみを認めて生きていけるように、あの子の総て——あの子の短かった人生のあらゆる出来事、あの子のしたこと、あの子の言った言葉を——もう一度自分の心の中に思い起こし、ひとつひとつ感情の整理を始めなければならない、という気持ちになってきた。

「一度には無理だよ」

と、チャールズは言う。

今日、チャールズのお母さまが来られた。優しく、気取らず、美しく、そしてとても思いやりがある方。私は、寝不足と薬のため、すっかり疲れ果てた。

あの子の人生は短かったが、回りの人に残していったものは、十分なもので、それは驚くほどである、と思う。パパには一年間の楽しみ、パパが亡くなってからはお母さまに。私とチャールズのお母さまとチャールズ、そして祖母には、あの最初の3～4ヶ月を。チャールズと私は、今あの子の死に際しては別として、彼の生まれた時ほどお互いに近しく思ったことはない。私達の結婚は、あの子によって、絶対に不変の素晴らしいものとなった。そして、世界のためにも彼の犠牲が何かの貢献となるかもしれない。

チャールズは私を慰めようと、

「あの子の光が、輝き続けるかもしれない……」

と言ってくれる。

今日は、だいぶ気分的にも落ち着いている。でも、鉛のように重く、だるく、疲れて悲しく、老いてしまったようだ。

あの子に代わる子はいない。でも、あの子は自分の回りの人々のために場所を作り、私達の結婚は、より完全なものになったのではないか。

5月15日

デトロイトの母とブレッキンリッジ夫妻は、今夜出発予定。

チャールズが言う。「何とか時の流れを元へ戻せないものかなあ。」

お母様とエリザベスと一緒に、散歩に行った。道路から少し逸れて歩いた。見事な、眩しく輝く白い花水木の枝が、私達の目の前に垂れ下がっ

ていた。それを見た途端に、私は張り詰めていた気持ちが崩れそうになった。私達は、あの事件以来初めて、十分な感情を込めていろいろなことを話し合った。あの夜以降、あの子は生きていなくて良かった。朗るく堂々とした、自信を持った男の子だった。皆の愛情に包まれて生き、私達の心の中の《王様》だったわ。あの子が、見知らぬ者の手で嫌な思いをさせられ、傷付き、動けなくなってしまうと思うだけでも胸が締めつけられる。せめて、即死であれば良いのにと、願うばかりである。助けを求めて、もがきながら、私を呼ばないでいてくれたら良いのにと願う。

報道されたあの子の写真を全部見た。本当に最近のものは1枚もなく、チャーリーには全然似ていない。とても残酷だわ。チャールズと義母は本当に素晴らしい。彼女もここにいてホッとしておられるだろうし、私の気持ちも安らぐ。義母は、とても落ち着いていて、しっかりしていて、一緒にいても全然窮屈ではない。二人でよく、これから生まれてくる赤ちゃんのこと、チャールズの科学の研究のことを話している。

私達には、まだ希望が持てることが二つもあるわ。

5月16日 月曜日

ホープウェルにて

C 「そして、僕達は、実に安全な暮らしをしていると考えていたのに！」

私達は熟睡出来ず、夜中に目を覚ましては、いろいろな話をする。考えながら夢を見ていた。

私は郊外を歩いている。よその子供達を見て「かわいいワ」と思い、立ち止まって乳母車の中の赤ちゃんの顔を覗き込んで、かわいい子だと思う。でも、私は自分の子供の顔を捜し求めていたのだ。きっと一生同じことをし続けるであろうと、夢の中で気が付いた。足取りは目覚め

ても重く、悲しかった。

チャーリーが、私達の元を去って行ってしまってから、それと同じ位の時を待たなければ、新しい子供は生まれて来ない。

最初は殺すつもりではなかったが、何か途中で狂ってしまったのではないかと、思われているようだ。本当にそうだったとしたら、私はとても耐えられない。そんなむごい運命の神の存在よりも、もっと無慈悲な人間の方を信じたい。あの週末ここへ来たこと、しかもスキン⁽¹⁵¹⁾は連れて来なかったこと、チャーリーが風邪をひき、ここに泊ったこと、私ひとりであの子の面倒をみていなかったこと、ベティがいけない時はいつも注意深くなり過ぎること、前の晩のように夕食の時にエルシーに2階に行ってもらわなかったこと……総て運命。そして最後に、あの子が窓から連れ去られて、苦痛を与えられたり、殺されたりしたことも運命だった。

すると、チャールズが、遺体の発見現場から帰ってきた。彼の話によれば、遺体の発見された場所は古い小屋だとのこと、そこを搜索していたようだ。こうなると、誘拐された夜に殺されていないということになる。私は、何のあてもない。毎晩不安の中で、これ以上やっていける自信はない。真実が解った時には、知らせたい。その時には、真実を直視し、法の裁きを求める。毎晩、何の目的もなく、私の息子の死の話を、「本当はああだった」「いや、実はこうだった」と、再度作り直す。——この解決策には、実はもっと恐ろしい話があり、あの件では実はもう少し慰められるような話がある——とか。これでは、私は勇気を持って立ち直ることが出来ない。

これでは、私にとっては、何の目的もないままに過ごした、今までの11週間に味わった苦しみと全く同じではないか。正義には、私の感情な

(151) リンドバーク家の飼い犬のスコッチテリア犬。

ど必要ないのか……。

5月17日 火曜日

ホープウェルにて

月曜日の夜遅く、カーティスが「総て、注目を浴びるための悪ふざけであった」と告白した。

何か建設的なことをしなければと、長いこと話し合った。出産まではニューヨーク近辺にいないといけないが、今はお腹の赤ちゃんのことだけが楽しみだ。生まれるまでは、何も新しいことは始められないような気がする。この子と関係のあることは何でもしたい。洋服の整理をしたり、新しく縫ったりしよう。

二つだけ、内省的にならずに、楽な気分で出来ることがある。飛行機とピアノ。ピアノは、童謡を弾く位のことでいい。チャーリーにも弾いてあげたかった。文章を書くとい省的になってしまうが、ある種のものは読むことが出来るかもしれない。

チャールズも深い悲しみのどん底にいるが、私の味わっている悲しみとは違う、恐らくもっと根本的なものだろう。それは、小さな物理的な記憶に基づいたものではないからだ。父親の息子に対する気持ちには、何か深いものがある。それは、短期的なものではなく、永く将来へと繋がるものである。私の悲しみは、毎日の生活の中で、共に日々を過した小さな身近な人の思い出の中の苦しみである。どの程度、肉体的なのだろう。また、ほかの子供がいることによって、どの程度和らげられるのであろうか？ チャールズは言う。

「どんなにかあの子を助け、無事連れ戻したかったか。」

私が、

「偶然の成り行きが悔しい」

と言うと、チャールズは、

「人生って、総て偶然なんだよ。偶然の出来事が起こる高い確率から、自分を守ることは出来るが、偶然を全面的に避けることは出来ないよ」と言う。

「民度の高い国では、権利として期待してもいいと思う……」

私達は二人共再出発をするのだと、考えている。事件から受けた衝撃と、最初の夜に殺されてしまったあの子の写真を見た後、私は考え直したことを思い出す。

もし、これが本当なら、もう二度と何も信じまい。善なるものと生活の安全保障に対する完全な不信。チャールズは、

「戦争と同じだよ」

と、言っている。

チャールズは、またカーティスと徹夜。さらに続く、告白。

5月19日 木曜日

窓に複製の梯子をかける。事件当時の様子をまた、再現した。

幼な子はバーラップの布袋（遺体発見場所の近くで見付かった）に包まれ、窓から手渡されたか、抱かれて外に連れ去られた。しかし、その梯子が折れ、一階のシャッターの方に倒れ（その跡がある）、その瞬間袋を持っていた男が手を放し、袋を落とした。あの子の頭がセメントの窓台にぶつかったが、犯人達はあの子の口に猿ぐつわをはめたか、麻酔をかけていて、最初は何の程度の怪我が解らなかった。まず、水のあるところに来て、その門の側で指サックが発見された。寝間着を脱がせて、出血しているところを確認し、おむつで洗った。子供が死亡しているのに気付いて、埋められる所を探して埋めた。

これが、もし本当ならば、あの子は目を覚ます前に死亡していたであ

ろう。私は、そう思いたい。もう当分、こんなことを繰り返してほしくない。チャールズは、絶え間なくこれに没頭している。でも、私はもうこの警察側の検証は懲り懲り。私の息子の思い出として、こんな姿が一番鮮明に私の心の中に残るのだろうか？ あの子のすっかり変わり果てた姿と、殺害の様子が思い出として残るのだろうか？ 私はエングルウッドに帰って、もう一度、あの子に逢いたい。怖いけれども、どんなに悲しみが深くとも、それがまともなことならば、こんな歪んだ、いつまでも続く信じられないような恐怖よりもどんなに良いか解らない。

こんなことをしている間は、生活を立て直すことは出来ない。前向きにではなく、後ろ向きに立て直すようなものだ。この犯罪は、毒のように、私の体内を巡って、私達の生活をどこまで蝕むのだろうか？

5月20日 金曜日

ホープウェルにて

ゆうべ、私は永い間じっと目を閉じ、あの子を心の中で蘇らせようと、「あの週末の場面を見たり、感じたりしよう。心の中でもう一度体験しよう」としてみた。そうしてみても、良かった。何よりも、指で描いていると、総ての出来事がうまく再現されるということを発見した。感触を——小さい頃汽車の中でよくしたゲームのように、少なくとも右手だけでも、あの感触をもう一度再生することが出来た。だから、今私はあの子に、

「チャーリー、お二階へ行きましょうね」

と言いながら、あの子の髪の毛の巻き毛に手を触れ、手をつなぐことも出来る。夜中に起こして、おシッコに抱いて行く時のずっしり重かったあの感触。嬉しいわ。ひとりで静かに、あの子のことを考えるために、いそいそとベッドに入った。

まるで、恋をしている時のように、愛する人が語ったこと、したことを思い出しては、追慕の情に温かく浸っている……。

ニールソン学長の奥様に（フランセス・スミス⁽¹⁵²⁾の事件の時に）「生きているのが怖い。悲しみに耐えられない……」と嘆いたら、

「自分の悲しみに耐える方が、楽なものよ」

と言われた。ついに、悲しみというものが自分のことになったのだ。ある意味では、夫人のおっしゃる通りである。もはや恐怖はない。心配することもなく、悲嘆の中にも悪夢のような恐ろしさはない。あの冬、私が体験したゾッとするような感情はもはやない。悲しみは残っても、私には〈耐えられる〉と解ると勇気が湧いてくる。幸せに暮らしていたのに、何か恐ろしい打撃でも受けるのではないかと、私はいつも恐怖の中に生きていた。

世間はあの子のことを「何の罪もない無力な赤ちゃん」等と言うが、私にとっては一人前の人間である。赤ちゃんではない。朗るく力強い、自信に満ちた一個の人間である。外部からの力によって、全然損なわれていず、触れられることもない。

5月21日 土曜日

ホープウェルとファレーズにて

アミーリア、アイルランドに着陸！⁽¹⁵³⁾

昨夜、あの子の洋服の入っている納戸を開けると、暖かい優しさに包まれ、私はその中に入ってみた。あの子の青いコートが掛かっていた。そして赤いタモシャンター（スコットランドのベレー帽）、ブルーのオランダのスーツ、あの子が首に巻いていた小さな薄いスカーフ等々、スーツケースを開け、中の洋服を一つ一つ手にとってみた。

壁にはおくるみが掛かっていた。白い靴、ウサギのスリッパ、青いコー

(152) アンが大学に在学中に、自殺をしたスミス大学の同窓生。

(153) ニューファンドランド島とアイルランド間の大西洋単独飛行を成し遂げた。

トのポケットには、貝殻とゴルフのティーと赤いミトンが入っていて、まるで、あの子の手に触れているようだった。引き出しには、あの日、チャーリーが遊んだ『ヘンゼルとグレーテル』のセットと、私が人形の家から出したり入れたりして遊んでやった子猫の人形。あの子は「キャーキャー」と言って喜んだわ。その子猫を見付けて、一瞬喜びを覚えた。こんなにチャーリーの想い出が身近に感じられ、本当に素晴らしかった。

悲しいことではあるが、私にとっては、犯罪事件としての想い出ではない。私の息子は、私の記憶の中に、現実には、生き続けているのだ。貝殻とティーは、お母様にあげたわ。

人生で経験する様々な不確定要素について、チャールズと語り合った。二度と彼に、「あなたは私のものよ」とか「もう誰にも渡さない」なんて、言わない。このように話している間に、状況は刻々と変わっている。私達から離れていつている。

ファレーズに伺った⁽¹⁵⁴⁾。午前中は大変だったようだが、エリザベスとお母様がエングルウッドに着いた。まだ、シーンとして肌寒い。濃い藤色のライラックがたくさん咲き、ペランダとどんよりと曇った空の下、黒真珠色の海には、雨が降っている。濡れた土、潮の香りと静かな波の音。まるで、3年前、チャールズと私が新婚旅行から帰ってきた時と何の変わりもない。あの夜のように、とても静かだった。唯一つ違うのは、私はとても年老いてしまったこと。にも関わらず、ちっとも賢くなっていないわ。

もしかすると、人は今という瞬間と、永遠にしか、期待出来ないのかもしれない。その中間には、何もないのかもしれない。この雨だれも、惑星も……。

(154) ロングアイランドのグッゲンハイム家の私有地。

海からの強風が窓に吹き付け、波のうなりが聞こえる。まるで、メインにいるようだ。

この^{あた}辺りをよく散歩する。今は、ライラックが花盛りだ。ハリー（・グッゲンハイム）は、娘さんのダイアンのために《箱入りの傘》を見つけた（石楠花の葉が2枚、クルクルと丸まっていたの）。私は、チャーリーが喜びそうなコマドリの割れた卵の殻を拾った。グッゲンハイム夫人は、優しく穏やかな方だ。夫人は子供のように、純粋な信仰の持ち主で、一緒にいるとホッとする。ここは、とても美しく汚れ^{けが}の無い修道院のようにひっそりとしている。私は戦争からの帰還兵のようだ。

将来についても、よく話し合う。どんな犠牲を払っても、私達は世間の目から解放された静かな毎日を熱望している。

新聞を見るだけでも吐き気がする。一切のしがらみ、希望、計画もなく、私達は再び、最初からやり直すの。チャールズは、まるで、薬にもずがるように、研究に没頭している。私は、平凡な家庭生活だけを望んでいたように思う。子供も、どうしても欲しいし、家があって、物質的にも、精神的にも、豊かな家庭を……。そのうち、いつかはそれ以上のことを望むようになると思うわ。例えば、仕事に就くとか……。でも、今はこれで十分だわ。

私が忘れてはならないことは、子供を亡くした人などたくさんいるのだということ。